



図書館の役割

工学部分館長

工学部教授 中西俊介

近年では大学図書館以外にも全国的に公立図書館がよく整備されてきていて、私の子供のころに比べると隔世の感があります。高松市にも市立図書館や工学部キャンパスの隣の県立図書館など立派なものがあり、蔵書数が多いことや網羅されている分野が広いこともあり多くの人に利用されているようです。田舎に育った私の小・中学校時代にはそのような公立図書館を利用する経験にも恵まれず、学校にある図書室を知っていたのみでした。それでも、中学校の図書室でたまたま借りて読んだ本が今の私の研究分野を志す小さなきっかけになったことを思い出すとき、これらの図書館が子供から大人まで多くの人の生活・人生にゆっくりとではあるがいろいろな作用をしているだろうことが想像できます。最近では図書館には本ばかりでなく、映像や音声を収録したいわゆる電子資料（デジタル資料）も豊富に所蔵されてきており、その進歩は目を見張るばかりです。

ところで、歴史的に有名な図書館といえばエジプトのアレキサンドリアにあったといわれる「アレキサンドリア図書館」があります。アレキサンドリアは、20世紀のおわりにプトレマイオス朝最後の女王クレオパトラの宮殿が海底から発見されるという大ニュースがあり、今も注目を集め続けている都市です。アレキサンドリア図書館は、マケドニアのアレキサンダー大王が拓いたとされるアレキサンドリアを首都としたプトレマイオス王朝のプトレマイオス1世が作った図書館で、最盛期には当時としては驚異的ともいえる70万冊（万巻）以上の収蔵を誇っていたといわれています。この図書館の完成は今から2300年前の古代のことです。当然ながらそこに所蔵されていた本は現代のような紙に書かれたものではなく、パピルスや羊皮紙に記されたものでした。羊皮紙やパピルスは安価なものではなかったはずですが、それらに文書を記した巻物を大量に集積するという作業が行われたわけです。アレキサンドリア図書館に関して耳新しいことといえば、2002年に近代的な図

書館として再建され、開館するに至っていることです。人類は何故このような昔から現代に至るまで図書館を作り、そこに書籍を集めてきたのでしょうか。古代にはアレキサンドリア図書館だけでなく、メソポタミア、ギリシャ、ローマにも図書館があったことが知られているので、3000年も以前から図書館を作ることが行われてきているのです。その目的は、アレキサンドリア図書館がムーセイオン（学術目的）とセラピオン（教育目的）とから構成されていたことから分かるように、知識・文化の継承と既存の知識をもとにした新たな知識・文化の創造であったと考えられます。知識・文化の継承と創造が大きな力になり、学術・文化的な繁栄だけでなく経済的な繁栄をももたらすことが古くから知られていたからでしょう。現代の図書館にもこの目的は脈々と使命として引き継がれてきている訳です。

翻って大学図書館について見てみると、この4月からの国立大学の独立行政法人化やインターネット社会の進展など取り巻く環境が急速に変化していますが、その役割の基本は古代からのものと大きく変わらないものでしょう。大学図書館ですので、特に学術の継承と創造に力点を置くことになるのが自然なことです。最近では電子ジャーナルの普及で学術雑誌の文献検索が居ながらにできる状況になってきていますので、これに対応できる恒常的な体制をつくるのが図書館の大きな課題になっています。大げさにいえば、電子ジャーナルの整備の状態がその大学における学術研究の帰趨を制するとも言えるかもしれません。一方、インターネットや電子ジャーナルの発展でいまや本などの冊子体が不用になるかということ、私にはそうは思えません。学術の継承（教育的）や学術の創造（研究的）には、本を傍らにしてじっくりと考える時間と空間が不可欠であると思うからです。

そのような環境をしっかりと確保していくことも図書館の重要な任務ではないでしょうか。